

京都大学	博士（人間・環境学）	氏名	岡本 源太
論文題目	ジョルダーノ・ブルーノにおける人間の尊厳と生の多様性 ——近代黎明のヨーロッパにおける〈生ける自然〉の帰趨		
(論文内容の要旨)			
本研究は、近代黎明のヨーロッパにおける〈生ける自然〉概念の帰趨として、ジョルダーノ・ブルーノ（Giordano Bruno, 1548-1600）の哲学、なかでもその人間論をあとづけたものである。ブルーノ哲学に対しては、おもにその自然観をめぐって、一方では近代的な科学思想の先駆として、他方では古代的な呪術思想の末裔として、対照的とも鏡像的とも言える解釈が紡がれてきた。けれども近年の受容史研究の進展は、むしろブルーノの人間論の多面的な歴史的影響力を明らかにしつつある。本研究もそうした研究動向を踏まえながら、二〇世紀最大のブルーノ主義者とも言うべきジェイムズ・ジョイスの示唆を敷衍して、感情や欲望など広く「感性」と呼ばれうるものの位置づけの変化を、ブルーノ哲学のなかにあとづけている。 道程としては、まず第一章で、人間と動物の区別という問題を通して、いかに「人間の尊厳」が位置づけられているのかを究明した。自然のあらゆる事物の形相を「魂」と捉えるブルーノは、生物と無生物との境界すら相対化する。このとき人間と動物との差異は、魂や知性などにもとづくような実体的なものではなくなり、人間はその活動を通して尊厳を獲得することになる。この尊厳を形成する活動とは、ブルーノによれば感情にほかならない。感情は紐帯の原理として人間を束縛するが、単一でなく多様な感情が触発されるなら、人間は逆に一つのものに束縛されなくなり、多様な状況と条件のもとで生きられるようになる。感情によって人間は神のごとき自由に近づくことができるのである。 第二章では、かくして人間の核心に据えられた感情のはたらきを、時間との関わりで明確にした。感情はかならず相反する方向へと同時に揺れ動いていると、ブルーノは言う。いかなる楽しみも苦しみをともない、感情はかならず葛藤を抱え込み、現在のはつねに苦悶のなかにある。けれどもまた、この現在の苦悶、ひいては感情の葛藤こそが、未来へと持続する享受を可能にする。ブルーノにあって、感情から解放された「賢者」の生が省みられず、むしろ感情が極限にまで分裂するという「英雄的狂気」の境遇が至高の生とされるのは、そのためである。 第三章では、こうした感情のはたらきが認識の局面にもたらす帰結を、ブルーノによる人間の無知と力能の捉えなおしのうちに追跡した。ブルーノによれば、知識の対象たる自然は無限で把握しがたいものであるため、誰しも最終的に知識を獲得できず、無知なままにとどまる。そのため、知識を追い求める者は十分な成果をあげられず、痛みを覚える。けれども、そのように痛みを引き起こす無限の追求活動は、空しいものではない。この痛みは人間の有限性のしるしではなく、むしろ無限なる自然を無限に追求しうる人間の無限の「力能」のあかしだからである。無限の真理をたえまなく追求しつづけるなら、たとえ最終的に知識を獲得できずとも、人間の無限の力能			

は発揮されている。追求活動の無限性は、真理それ自体の無限性のあらわれであり、このとき人間はたしかに痛みの中かで真理に触れているのである。

第四章では、このように捉えなおされた無限の力能のありようが、人間の創造行為の理解、さらには神の創造行為の理解をも刷新することを確認した。無限の力能はつねに無限に創造すると考えるブルーノにとって、神であろうと人間であろうと、創造を選別するなどはありません。選別をおこなうなら無限でなくなってしまう。なにか規範が創造を方向づけて制限するなどということは、無限の力能には相応しくない。そのために、創造されたものとそれが示す美はけっして一様でなく、むしろ無限に多様なのである。

第五章では、人間の生の理想を「英雄的狂気」と名指し、自然とともに流転することと見なすブルーノの思想を、理解しようと試みている。ブルーノは、「メランコリー」に生の救済を見いだしたペトルルカ主義者たちを批判する。すべてのものは永遠に流転を繰り返すのだから、芸術も思考も、愛しの人の肖像を描いて永遠に留めおこうとするメランコリーの営為ではありえない。むしろ逆に、自然の真理たる永遠の流転そのものを体現して、つねに新しきものへと変身しゆく「英雄的狂気」の生こそが生の救済にいたるのだという。

この道程を経て、結論として、ルネサンスにおける人間の発見というあまりにも知られたテーゼをとりあげる。ブルーノによれば、人間が感情を抱くという事実は自然の真理たる永遠なる流転それ自体であり、また人間が人間的なるものを越え出ていける力能をもつことの証左でもある。このとき、ルネサンスに発見された人間の尊厳としてのその生の多様性は、それまで考えられてきたような選択肢の多様性ではなくなっている。生きて流転する自然の中、感情にしたがいながらいっそう流転しつづけることが、人間に多様性を、自由を、尊厳を与える。生は、多様であることそれ自体によって尊厳をもつのである。

(論文審査の結果の要旨)

従来、ブルーノ哲学については、おもにその自然哲学に多く関心が寄せられてきた。確かにブルーノが古代以来の〈生ける自然〉に立ち戻りながら、それを新たにニコラウス・コペルニクス以降のコスモロジーと結び合わせ、特異とも言うべき自然の姿を描き出したことは、誰しも否定しないところである。しかし近年の研究は、ブルーノ哲学の影響力が自然哲学の領域にとどまらなかったことを明らかにしつつある。ブルーノ哲学をもっぱら自然哲学ないし形而上学として受容したドイツ観念論から新カント主義への流れとは別に、ヨーロッパの自由思想と啓蒙主義がブルーノ哲学を広義の「道徳哲学」として、つまり「人間」についての思想として受容していたのである。この事実を踏まえたうえでブルーノの人間論を把握しなおすことは、実のところほとんど端緒にもついていなかった。本論文の最大の功績として第一に挙げるべきは、ブルーノの自然哲学をその人間論に架橋してみせたことであろう。

架橋の道筋としては、まず、人間と動物の区別という問題を通して、ブルーノが自然を〈生ける自然〉として把握していくなかで人間をどのように位置づけたのかを究明する。そして、人間の核心に据えられる感情のはたらきを、時間との関わりで明確にしたあと、その感情のはたらきが真理探究の場面にもたらす帰結を、ブルーノによる人間の無知および力能の捉えなおしのうちに追跡し、この捉えなおされた人間の力能の有様が、人間の創造行為の理解、さらには神の創造行為の理解をも刷新することを確認する。そのうえで、人間の至高の生を「英雄的狂気」と名指し、自然の流転に寄り添うこととするブルーノの思想を、理解しようと試みるのである。これらの道筋を経て明らかになった人間論を、ルネサンスにおける人間の発見という、あまりにも知られたテーゼを背景として再考するにいたる。

ルネサンスというヨーロッパ近代の黎明期にブルーノの人間論を置き直してみることで、近代を思考する新たな視座を明確に示しえたこと、それが本論文の第二の功績として挙げられよう。

人間が人間的なるものを越え出て、多様な生をおくりうるということ、それこそ、今日「ヒューマニズム」と呼ばれるルネサンスの運動のなかでしだいに発見されていた「人間」の姿であった。ピーコ・デッラ・ミランドラをはじめとする「人間の尊厳」をめぐるルネサンスの語らいのなかで「神にも獣にもなりうる人間」という形象が好まれたのも、人間には定められた本性も固有の相貌もないからであり、人間の生が多様だからである。しかしピーコにあっては、人間は多様な生をおくりうるとされながらも、そのなかから自由意志によって一つを選び取ることにこそ、人間の卓越性があるとされていた。そして、人間的なるものを越え出て選び取られるべき生は、感情と身体を超越して知性的に生きることにはほかならなかった。これに対してブルーノ

は、知性的に生きることを、自然の流転とともに、つまり感情の変転にそって生きることとして解釈しなおし、人間の生の理想を「賢者」から「狂人」へと変質させている。このとき多様な生は、そこから一つのみが選び取られるようなものではなく、流転するなかで次々と生きられるべきものとなっている。すべての形相が魂であり、生は実体として無限であり遍在するという、ブルーノの〈生ける自然〉の教説は、生の多様性を選択肢の多様性として理解することを決定的に禁じる。「英雄的狂気」の生とは、多様な生のなかから選び取られた一つの生ではなく、むしろ生の多様性が極限にまで高められた生なのである。本論文によれば、ブルーノが開いた「近代」とは、まさしくこの人間の生の多様性の発見にほかならない。

「ベーコンやデカルト以上に、ブルーノこそ、近代哲学と呼ばれているものの父と考えられるべきだ」と、20 世紀初頭にジェイムズ・ジョイスは記した。またジョイスは、「生きて希望をもっては死んで失望するあらゆる存在への憐れみの感覚」をもって近代を画するものと見なした。本論文は、そういったジョイスによる示唆とともに始まり、自ら明確化したブルーノ哲学により、その示唆を根拠づけることで締めくくられる。ブルーノとともに近代の黎明に感情が人間の核心に据えられ、それによって生の多様性が見いだされ、尊厳にまで高められたからこそ、「あらゆる存在への憐れみの感覚」も生み出されえたであろうし、生の多様性が、選択されることのありえない多様性であるからこそ、あらゆる存在に憐れみが向けられうるのであり、顧みられるに値しない生などありえないからである。

このように本論文は、ブルーノ哲学を人間論を中心に明確化するとともに、近代を思考する新たに視座を提示することに成功している。

よって本論文は、博士（人間・環境学）の学位論文として価値のあるものと認める。また、平成 23 年 1 月 21 日、論文内容とそれに関連した口頭試問を行った結果、合格と認めた。

Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降